

書写の授業Q&A その1

山梨大学教授 宮澤 正明

Q 「中学校では、国語科書写の授業時数が少なく、本来の目標を達成することが難しい状況です。何かよい方法や工夫はないのでしょうか。」

「中学校学習指導要領」には、中学校書写の授業時数について、次のように示されています。

書写の指導に相当する授業時数の国語科の授業時数に対する割合は、第1学年は10分の2程度、第2学年及び第3学年は各学年10分の1程度とすること。

〔国語 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 2―(3)ウ〕

単純にとらえると、中学校第一学年では国語の授業五回のうち一回程度、第二、第三学年では国語の授業十回のうち一回程度は書写の授業に充てられることになっています。ただ、国語の授業数そのものが目減りしている状況の中で、書写の授業の充実はお

ろか、時間数を確保すること自体が困難な状況にあることは想像に難くありません。書写学習の意義を認識し、子どもたちの手書き文字の向上、手書き文字文化の継承を強く願う指導者は、何とも歯がゆい思いをされていることと想像します。そこで、少ない授業時数の書写が充実して目標に向かって機能するために、また、書写の授業が何らかの理由によって割愛されないようにするための工夫を考えてみましょう。

○書写は国語科の基礎・基本としての「言語事項」であることをふまえる。

このことは言うまでもないことですが、書写の学習はややもすると、次のようにとらえられやすいようです。

- ・書写は、文字を上手に書くための技能学習である。
- ・書写は、国語の「話す・聞く、書く、読む」の学習活動とは一線を画す学習である。

このように、書写は国語科の中にありながら、国語から遠い存在のように考えられやすい一面があります。このことを背景として、時に、展覧会出品や書き初めなどの練習として扱えばよいとされることがあります。かつて、学校教育の毛筆学習においては、このような伝統的歴史があるのでやむを得ない部分ではありますが、この考え方を引きずってはいけません。いつまで経っても書写は国語科に溶け込めません。書写の授業の充実をめぐり、確実な授業時間を保証していくためには、これらの考え方を払拭することが重要です。

文字を手で書く行為は、単なる筋肉運動ではなく知の総和によって行われるものです。TPOに応じて用具・用材を選択し、

(2)書く学習活動と書写のリンク

書き文字には、メモや日記のように私的なものと、手紙や報告書のように他者の目に触れるものとがあります。特に後者は、オフィシャルな文書として正確に伝えなければなりません。国語には、書く活動として作文や報告書の作成があります。また、総合的な学習の時間では、手紙、報告書、プレゼンテーションの資料などを作成することがあります。これらはすべて他者の目に触れるものとして文字を書くことになります。そこで、自分の文字が他者にどのように伝わるのかを考えさせるよい機会になります。これまでの書写で学習したことを想起させ、文字を丁寧に書くことの意義を語りかけるだけでも、書写の学習の日常化と結びつくのです。

授業時数が少ない書写を国語科の礎としてとらえ、他の学習とリンクさせることで充実を図ることができるのではないのでしょうか。

書式に合わせて書き分けること一つをとっても、思考力や判断力を必要とします。文字を正しく整えて読みやすく速く書く能力としての書写力は、国語科の目ざす「伝え合う力」の一つなのです。書写の学習を通してさまざまな知識を獲得して能力を育むことができ、それらを活用することで「生きる力」となっていくことを理解したいものです。

○書写と他の学習とのリンク

書写の授業時間が少ないことを嘆いてばかりはいられません。書写の授業を充実させることはもちろんのこと、漢字学習や他の書く学習活動との横断を試みることも必要です。

(1)漢字学習との相互乗り入れ

漢字指導も時間が少ないと言われています。漢字指導の際に、書写の内容も取り入れることを提案します。

例えば、新出漢字の学習の際、それが左右の組み立ての漢字であれば、「偏は、右端をそろえて、横画は右上がりに書くんだよ。」の一言を添えるだけで、書写の学習とリンクします。また、書写の学習にも漢字学習を導入することが望まれます。課題文字の字源に触れたり、課題文字を用いた熟語や短文を作らせた上で、まとめ書きをさせたりすることで漢字の知識や運用力の学習とリンクします。

このように、時間数の不足するところは、さまざまな学習と相互乗り入れをすることで膨らませていくことが大切だと思います。